KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ドン・キホーテのカタバシス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹下, 和彦 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006285

関西外国語大学 研究論集 第81号（2005年２月）
Journal of Inquiry and Research, No.81（Feb. 2005）

ドン・キホーテのカタバシス

丹 下 和 彦

はじめに

「カタバシス」（ギリシア語 κατάβασις）とは“下降”の意である。“洞穴へ入ること”の意もある。転じて“冥府行”の意味にも用いられる。ホメロス『オデュッセイア』第11巻は、オデュッセウスが冥界へ下り、予言者テイレシアスをはじめいまは亡き親族知人らの霊魂との出会いの模様を描くが、通常この巻に「カタバシス」[1]なる呼称を与えるのがホメロス学での慣例である。

唐突ではあるが、いまわたしたちはカタバシスなる語を、またその概念をドン・キホーテの下降すなわちモンテシノスの洞穴への潜入（セルバンテス『ドン・キホーテ』続篇第22、23章）に当て嵌めて、両者に共通するところがあるか否か、あるとすればそれはどのような意味においてであるのかを考察してみたいと考える。ドン・キホーテも洞穴内へ下降カタバシスするのである。したがって少くとも双方の物語の主人公オデュッセウスとドン・キホーテは、それぞれあるいは冥界へあるいは洞穴内へと“下の世界”へ下降する点で共通性があることになる。

しかしドン・キホーテの場合、あれは“冥府行”であったのであろうか。これは検証が必要になる。ただなによりも両作品に、その長い物語の途中で冥界へあるいは地底へ下降する１章が設けてあることは、注目に値することであろうと思われる。この１章は、それぞれの作品の中で果してどのような意味をもつのであろうか。その意味が解明され、両作品のあいだに単に形態上の相似性以外の相似性、共通性が認められるとすれば、「カタバシス」なる現象にかこつけて両作品の比較検討を試みることも許されるであろう。幸いといおうか、『ドン・キホーテ』の作者セルバンテスは己が作品を提示するに当って以下のようなたいへん寛大な態度を、われら読者に許容してくれている。「また、したがって、（読者諸君は）この伝記（『ドン・キホーテ』のこと。筆者注）については、思うままのこと todo aquello que te pareciere をいうがよろしい。悪く言ったからって、どなりこまれる心配は無用、よく言ったとて、褒美にありつく算段も無用だがな」[2]（『ドン・キホーテ』正篇緒言）。わたしたちはこれを大いに多と

したい。思うがままのこと todo aquello que *nos* pareciere を言って褒美にありつこうなどという算段は端からないが、ひょっとすると『ドン・キホーテ』解釈に一石を投ずることができるかもしれない。まずはカタバシスの本家、『オデュッセイア』第11巻の考察から始めたい。

1．オデュッセウスのカタバシス

すでに触れたように、オデュッセウスは『オデュッセイア』第11巻でカタバシス、すなわち冥府行を敢行する。それより前オデュッセウスは部下とともにアイアイエ島に流れ着き、島の主キルケの許に身を寄せていた。1年の滞在ののち、オデュッセウスは部下に諭されて帰国する気になり、その許可をキルケに願い出る。キルケはこの願いを受け入れるが、一つ条件をつける。それが冥府行である。「だが、そなたらは帰国の前に、今一つの旅 ἄλλην ὁδόν を仕遂げねばならぬ、すなわち冥王と恐るべきペルセポネイアの館へ行かねばならないのです。これはテバイの盲目の予言者、テイレシアスの霊に行先のことを訊ねるため」(*Od.* 10. 490～93)[3] というのがそれである。難行を課せられた思いのオデュッセウスは「転々と身を捩じて泣く」（同、499）が、そのオデュッセウスにキルケは冥界へ続く道筋を教える。海路船で行くのである。「帆柱を立て白帆を張ってあとは坐っておればよろしい。船は北風の息吹きが運んでくれましょう。船を進めてオケアノスの流れを越えたならば、平坦な岸が連なり、ペルセポネイアを祀る森が茂り、ポプラの大樹と、時ならず種子を落してしまう柳の立ちならぶ場所に出るから、そこで深く渦を巻くオケアノスの流れの岸に船を揚げ、そなたは冥王の暗湿の館へ入ってゆきなさい。ここでは「火焔の河」と「憎しみの河」の支流である「歎きの河」とがアケロン河に注いでおり、巨岩をめぐって二流れの河が轟々たる水音を立てて合流しているのです。そこで勇士よ、これからわたしが指示するように、その場所へにじり寄って、縦横それぞれ一腕尺ほどの穴を掘りなさい。それからその穴の縁に立って、すべての亡者に供養」（同、506～17）し、テイレシアスの霊を待ち受けるがよいと。オデュッセウスはこの指示どおりに航行する。そして冥界に達してテイレシアスやその他知人、親族らの亡霊と邂逅することになる。第11巻が詳しく伝えるところである。

さてこのときに冥界は現世とどのような位置関係になっているであろうか。キルケの教示するところによれば、まずそれは「オケアノスの流れを越え περήσας」（同、508）たところにある。オケアノスとは、古代ギリシア人の知識では、自分たちの住居する大地（この世）の果てをぐるりと取り巻いて流れる大河のごときものであった。そのオケアノスに到達するために、オデュッセウスら一行は海路航行している。しかもアイアイエ島から「北風の息吹き πνοιῇ Βορέαο」（同、507）を受けて南行している。そして到達したオケアノス河のあたりは「キンメリオイ族が……霧と雲に包まれて住んでいる。輝く陽の神も……光明の矢を注ぐことが絶え

てなく、憐れな人間どもの頭上には、呪わしい闇が拡がっている」(*Od.* 11. 15〜19)。闇の国である。アイアイエ島から南行して太陽の光の乏しい地域へ至るとなると、実際の地図上では那辺を想像すればよいのか。正確な位置測定は不可能でもあるし、また不要であるかもしれない。ただここでわたしたちが確認しておきたいことは、先に触れたとおり、古代ギリシア人はその住む世界を平坦な大地であるとし、その周囲をオケアノス河が取り巻いて流れていると想定していたらしいことである[4]。そして冥界はそのオケアノスを越えたところにある。となるとオデュッセウス一行は高所から低所へ文字通り下降カタバシスしたわけではない。平坦な海上を航行してオケアノス河に至り、それを“越え περαν”て冥界に至ったのである。これをしもカタバシスと称するのは、物理的に下降したゆえではなく、この世からあの世へ移行したことをもってそう称するのである[5]。

さてオデュッセウス一行はこのオケアノス河の岸に船を舫い、岸に上って流れに沿って歩き、キルケの指示どおりの場所で縦横一腕尺四方の穴を掘り、招魂のための供犠を行なって予言者テイレシアスの亡霊が現われるのを待つ。やがて姿を現わしたテイレシアス(の亡霊)は、帰国を願うオデュッセウスの今後を以下のように予言する。曰く、海神ポセイドンは息子ポリュペモスがオデュッセウスのために目を潰されたことを怒り、従前どおり今後も帰途の航路を邪魔するであろうこと、次に訪れるトリナキエの島で太陽神エエリオスの牛群をもしも害することがあれば、その懲罰に部下全員を失ってただ一人惨めな帰国をするであろうこと、また故国イタケに無事帰着したとしても、留守宅は妻ペネロペイアへの求婚者たちによって荒されており、これを退治する大仕事が待っていること、さらに、そのあとまだ櫂を手に海を知らぬ民の国へ旅を続け、櫂を大地に突き立ててポセイドン神へ生贄を捧げ、さらに国許へ帰って神々すべてに百牛の贄を献じるべし、最後は安らかな老衰死が予定されていようというのがそれである。

ここでは今後まだ苦難の旅が続くとはいえ、そしてまたたった一人になる可能性はあるとはいえ、とにかく故郷イタケへの帰国が保証されている。その留守宅を妻への求婚者らが荒していることは初耳であるが、それへの報復も予定されている。これまでのいつ帰国できるやらあてのない冒険の連続から一歩抜け出て、ここで初めて帰国の道筋が明示されたのである。

帰国への確証を得たオデュッセウスが次に知りたがるのは留守宅の模様、家族の動向、ことに妻ペネロペイアのことである。これには母アンティクレイアの亡霊が答える(アンティクレイアはオデュッセウスがトロイアへ向けて出立したあとに鬼籍に入っていたのである)。曰く、妻ペネロペイアは「堅忍の心を胸に τετληότι θυμῷ」(同、11. 181)屋敷に留まっているし、王権 γέρας は他人の手に移ってはいず、王の領地 τεμένεα は息子テレマコスが管理している。そして父ラエルテスは田舎で隠居生活をしているが、寄る年波と闘いながらそなたオデュッセウスの帰還を待ちわびている、というものである(同、11. 180〜203)。ここでは

留守宅を荒らす求婚者らの消息には触れられていない。しかしながら先のテイレシアスの予言といい、この母アンティクレイアの話といい、それは具体的な古里情報である。10年前トロイアを出港して帰国の途についたオデュッセウス一行は、イタケという目標は設定されておりながら、その道程は試行錯誤の連続であった。キコネス人の国、ロトパゴイ族の地、キュクロプス族の島、風神アイオロスの島、ライストリュゴネス族の国々を経て、いまやっとキルケの島に漂着したところである。しかしいまキルケの指示にしたがって冥界へ降り、上に見たようにテイレシアスの予言および母アンティクレイアからの情報を得て、新たに帰郷への具体的な道筋、その方向性が定まることになる（冥界では上記二人以外の人物たちの霊にも多数出会う。しかしオデュッセウスの“今後”に関する情報をもたらす者はほぼこの二人に限定してよろしいかと思われる)。20年間離れていた故郷イタケの様子が、またそこへ至る道筋がいまやっと彼に示されるのである。これまで隠されていた情報が提示され、以後の航海図と目的地の現況を知らされたことによって、オデュッセウスの旅は現実化し、具体化することになる。ここで、これまでオデュッセウスが旅してきた世界は、マレアの岬で嵐のため航路をはずされて以来、地図上に同定できない架空の地域であったことも、併せて考慮されてよかろう。もちろんこのあともまだ架空の地の旅は続く。最後の寄留地パイエケス人の島も地図上に同定できない架空の地ではある。しかしこの冥府行ののちの旅は帰国が約束された旅である[6]。途中寄港する地はほぼすべてキルケが告げる予定表に載っているところばかりである[7]。オデュッセウスの旅は架空の世界から現実の世界へ戻る。冥府行の前と後で、旅は画然と区別されなければならない。後の旅は、いわば海図のある旅、羅針盤付きの旅なのである。

オデュッセウスはキルケの指示を受けて冥界へ降り、テイレシアスの予言を受けて地上へ戻り、ふたたびキルケの懇ろな助言を背に最終的な帰郷へ向けて新たな旅立ちをすることになる。地下の世界への「いま一つの旅 ἄλλην ὁδόν」(*Od.* 10. 490) は、キルケの言葉どおり帰国を確実なものとするための必要不可欠なものであったのである。それは架空の世界から現実の世界へ戻るための儀式であったのである。

2．ドン・キホーテのカタバシス

『ドン・キホーテ』続篇において、ドン・キホーテはお目当てのサラゴサの武芸試合の開催日までの間、暇つぶしの冒険の一つとして、モンテシノスの洞穴探検を試みる。道案内役は、道中知り合った剣道の達人の学士の従兄に当る古典学者である。この古典学者はちょうど『変形、一名イスパニヤのオヴィディウス』なる一書を執筆中で、洞穴内に降るドン・キホーテにそれに収録するに価する現象の発見を期待する。そしてのちに洞穴内での体験談を、サンチョともどもドン・キホーテから聞かされる役割をも引き受けるのである。その彼の案内で洞穴の

入口に達したドン・キホーテはその身をロープで縛り、彼とサンチョに見送られ、思い姫ドゥルシネア・デル・トボソの庇護を祈願しながら洞穴内へ下降潜入する。

さてこのとき、このモンテシノスの洞穴はまずドン・キホーテ自身によって「奈落 el abismo」と表現されている、「それがしは今、目前にあらわれたる奈落へ下り、その深みを冒して、身を闇にうずむ所存なるも」(続篇第22章)[8]と。abismo には地獄の意味もある。一方、送り出すサンチョは、「わざわざその暗闇 esta oscuridad にへえるため、捨てていぎなさる enterrarte この世の光 la luz desta vida」(同上)[9]と言う。洞穴内は闇の世界 oscuridad であるとされる。そして enrerrar には「地中に埋める、埋葬する」の意がある。ここでサンチョはドン・キホーテの行動すなわち地上、この世から地下、冥界へ移行することを、闇に身を埋める行為すなわち生きながらの埋葬に等しい行為、冥府行にも等しいものとみなしていることになる。いずれにせよそれは単に物理的な上下の距離を下降することを意味するだけのものではない。それと同時にこの地上の世界とは違う世界に入っていくことになるのである。

そこが地上とは違う世界であることは、そうサンチョに意識されていることは、次の章句からも明らかである。これはもうすでに洞穴から地上に戻ったあとのことであるが、サンチョはドン・キホーテに向かって「おめえ様はあの世へ al otro mundo おりて行き、そしてよくねえ場所で en mal punto、モンテシーノス様に出会いなさっただよ。おめえ様をこんなざまにして、けえしてよこしただからね。おめえ様が、この上の世に acá arriba にいなさったときにゃ〈略〉」(続篇第23章)[10]と言っている。古典学者もまた洞穴の中の世界を「あなたがこの中に allá abajo 降りておられた実にみじかい時間のうちに」(同上)[11]と言っている。acá arriba(上のこちら)と allá abajo(下のあちら)は、文字通り地上の世界と地下の世界を、まずは意味しよう。しかしサンチョは allá abajo を al otro mundo と言い換える。otro mundo(違う世界)は、mundo(この世)と対置される“あの世”となる。それは mal punto(よくねえ場所)であり、さらに infierno(地獄)とも言い換えられるところなのである(続篇第22章)[12]。この“地獄 infierno”という表現は、ドン・キホーテには拒否されるけれども、地上の光の世界の住人であるサンチョにとっては、そこが異常でまた歓迎すべからざる世界であったことは明らかである。洞穴内での体験談を聞かされたあとでも“よくねえ場所 mal punto”としか表現されないその世界とは、では実際にはいったいどのような世界であったのか。ここでわたしたちもまたサンチョ、古典学者とともにドン・キホーテの語る体験談に耳を傾けてみる必要がある。

洞穴内でドン・キホーテが目にしたのは壮麗な宮殿であった。その大門が開き、中から上品な翁が姿を現わしてドン・キホーテを迎えた。それが宮殿の主モンテシノスであった。このいまに洞穴にその名を遺すモンテシノスとは何者か。モンテシノスとは、イスパニアのロマンセの伝えるところによれば、かの歴史に名高いシャルルマーニュ帝のスペイン遠征時、退却する

帝の殿軍を務めたブルターニュ辺境伯ロランらとともにピレネー山中のロンセスバリェス（ロンスヴォ）の谷間で敵勢の待ち伏せに遭い、敗走したシャルルマーニュ十二卿将の一人である[13]。そのロンセスバリェスの戦いの折、彼は討ち死した従兄で親友のドゥランダルテの臨終の際の願いを容れてその心臓を短剣でえぐり取り、思い姫ベレルマの許へ持参したことになっている。そのモンテシノスが、しかしいまはドゥランダルテや近習の者、老女中らとともに「（賢人メルリンの）幻術にかかって encantados、この人外の境に en eatas soledades」（続篇第23章）[14]、500年もの間閉じ込められている。そのモンテシノスと、ドン・キホーテは地底の世界で邂逅したのである。モンテシノスばかりではない。ドゥランダルテの屍にも、またその死を悼み悲しむベレルマの姿をもそこで目にすることになる。

この邂逅はドン・キホーテの旅の一つの到達点であると言ってもよい。その旅とは、サンチョに伴われロシナンテの背に揺られる現実の旅ではない。騎士道物語を読みすぎた結果辿ることとなった心の旅、いや妄想の旅のほうである。架空の旅のほうである。騎士道物語に登場する騎士たちの華やかな活躍で脳中が一杯になっているドン・キホーテは、遍歴の途次に遭遇するさまざまな事象に脳中の妄想を適応させようとする。羊群を軍勢と見まがう挿話がその適例である。彼は「自分が見ない、存在もしないものを想像で見ながら viendo en su imaginación lo que no veía ni había」（正篇第18章）[15]、スペイン騎士道物語の代表作『アマディス・デ・ガウラ Amadís de Gaula』に登場する事物・人間をはじめ、自身の創作になるでたらめの地名・人名を列挙して軍勢の説明に供する。「なぜというに、この人は、いかなる時間にも瞬間にも、想念 la fantasía を、騎士物語に出ている合戦、幻術、椿事、狂態、恋慕、挑戦といったようなもので満たし、語るところ、考えるところ、なすところをことごとく、そうしたものに結びつけたから」（同上）[16]である。こうした彼の想念は、このモンテシノスの洞穴という場を得ることによって、これまででもっとも美わしい、もっとも幸福な、そして虚構でありながら（ドン・キホーテはこれを拒否するが）この上なく詳細にして複雑かつリアルな情景を現出させることになるのである[17]。ひとりドン・キホーテの脳中の想念としてではなく、その場に臨んで見聞した一つの挿話として、作者はそれを読者の前に開陳するのである。

ドン・キホーテを出迎えたモンテシノスは、洞穴のもつ秘密を世に広く知らしめてほしいと宮殿内に彼を招き入れる。そのモンテシノスにまずドン・キホーテは、“上の世界で en el mundo de acá arriba”で語られている話、すなわちドゥランダルテの臨終とその心臓を思い姫ベレルマの許へ運んだ話は事実か否かを訊ねる。モンテシノスはこれを肯う。ここでわたしたちは、ドン・キホーテがかのように架空の世界の人物たちに遭遇しながら、しかしこれまでのようにその世界に同化することはせず、上の世界の人間としていわば客観的な立場から冷静に対処していることに留意しておく必要がある。彼はいわば観察者である。ちょうど生者として冥界に降ったオデュッセウスさながらに。

さてモンテシノスはドン・キホーテを一つの部屋に案内する。するとそこに大理石の墓があり、その上にドゥランダルテの屍が横たわっていたが、命絶え心臓を抜き取られたはずの屍がそのとき声を発し、思い姫ベレルマにわが心臓を届けよと、ドン・キホーテの眼前でモンテシノスに嘆願する[18]。モンテシノスは、すでにその請願はかの敗戦の折に果された旨を告げ、以後500年間関係する者一党がメルリンの幻術にかかってこの地底に幽閉されていることを語った上で、改めてドン・キホーテをドゥランダルテに紹介し[19]、「されば、この仁により、この仁の助けをえて、われらも、幻術をほどかるる望みなしとはしませぬぞ」（同第23章）と言う。その傍らをドゥランダルテの最期を悼み悲しむベレルマと召使の行列が通りすぎていく……。

遥かな昔に虚構の物語の登場人物となったモンテシノス、ドゥランダルテやベレルマと、ドン・キホーテはこの地底で遭遇する。それは地上の場所では決して起こりえなかったことである。幻術師メルリンといえども地上にはこれだけの舞台を設定することは不可能であったろう。ドン・キホーテは洞穴内へ下降し地底に至ることによって、はじめて現実に邪魔されることなくその幸せな妄想の極致に到達することができたのである。作者セルバンテスは主人公ドン・キホーテと古い騎士道物語の登場人物たちとの邂逅の場をここに態々、しかも意図的に設定した。それはなぜなのか。意図的というのは、篇中他には騎士道物語中の架空の人物たちがドン・キホーテとこのように親しく交わる場はないからである。そして、先に触れたように、このときドン・キホーテは地底に展開する世界、過去の世界、500年の昔に凍結した世界に現世から訪れた一人の観察者という立場にあるからである。こうした設定は、一つにはドン・キホーテにその想念の世界で思うさま遊ばせるためであったと思われる。そしてそのことによって、想念の世界における遍歴の旅を、いよいよ終らせるためではなかったか。

3．ドン・キホーテ、夢の終り

ドン・キホーテの地底探検譚を古典学者ともども聞いていたサンチョは、これを「だれにも考えつけねえでたらめばかり los mayores disparates que pueden imaginarse」（同第23章）[20]と決めつける。サンチョは地上の、この世 el mundo の人間である。いまの時代、いまの社会を生きている人間、そしていまの時代と社会の最大公約数的なものの考え方、いわば常識にどっぷりと浸かった人間である。それゆえその常識に合わぬ disparate、でたらめな話は端から受け付けない。これまでも彼は想念の世界に遊ぶ主人ドン・キホーテと、その点で厳しく対峙してきた。夢の世界に遊ぶドン・キホーテに対して現実をよく見るようにと、つねに諭してきたのである。風車を巨人と見まがう挿話（正篇第８章）で、「しなさることをようく見なせえよ mirase bien lo que hacía、風車にちげえねえだから、と言ったでねえか」[21]というのがそれであり、またこれに続くビスカイヤの婦人の馬車をめぐる騒動（同上）で、「よく見さっせえ

よ。いんにゃ、しなさることをよく見さっせえてよ Mire que digo que mire bien lo que hace」[22]というのがそれである。それゆえこれまでは、このサンチョという「現実」が対置されることで、ドン・キホーテの夢はまさに夢として終っていた。夢は現実の前に砕け散るのが常であった。ドン・キホーテの旅は、この夢と現実との葛藤、そして夢の挫折、その繰り返しであったといってよい。

それがこのモンテシノスの洞穴の場に至って一変する。そこには夢と現実との葛藤がないのである。それはすべて夢の世界である。ドン・キホーテは現実に邪魔されることなく夢の世界を堪能できるのである。それは、そこがこれまでのように地上の世界でなく、現実の及ばない地底の別世界 otro mundo であるからであろう。またそこにはこれまで常に陪席していた現実の世界のあの監視者サンチョがいなかったせいでもあろう。ラモン・メネンデス・ピダルは、このモンテシノスの洞穴ではドン・キホーテの英雄的理想 el ideal heroico は従来のように現実 la realidad と葛藤することなく、むしろ現実との厄介で痛みを伴う接触から解放され自由な状態になっているとし、そこにこの冒険のもつ例外性、特異性 lo exceptional, lo único があるのだと言っている[23]。それゆえに、現実との痛みを伴う接触から解放されているがゆえに、ドン・キホーテは夢の世界で存分に遊ぶことができたのである。地底の世界を地獄 infierno と評したサンチョに、ドン・キホーテは鋭く反応する、「地獄などと言ってはなりませぬ。あとでお話し申そうが、ぜんぜん当っとらぬからな no lo merece」(続篇第22章)[24]と。そこは、「いかなる人間も見たり遭ったりしたことのない、すこぶるよい味の、こころゆく夜昼と眺め la más sabrosa y agradable vida y vista」(同上)[25]、いわば極楽の世界であったのである。

しかしサンチョはこのドン・キホーテの語る物語を誰にも考えつけられぬでたらめと断じ、「もはや疑いなく、主人が正気を失い、まったくの狂人になったことを知ってしまった su señor estaba fuera de juicio y loco de todo punto」(同上)[26]のである。そしてまたもや例の決まり文句、「自分をようく見なせえよ vuesa merced mire por sí」(同上)[27]を吐くのである。サンチョがでたらめと断ずるのはなぜか。彼は地底に同行せず、これまでのようにドン・キホーテの夢想が現実と葛藤し粉砕されるところを実見しなかったにもかかわらずそう断定するのはなぜか。

それはドン・キホーテが地底で思い姫ドゥルシネアに遭遇したと語ったからである。遅れ馳せながら一つ付け加えておこう。ドン・キホーテは地底の世界で、モンテシノス、ドゥランダルテ、ベレルマらに出会っただけでなく、まだ他に「おまえがびっくりすることを聞かせてやるぞ ¿ qué dirás cuando te diga yo ahora como ... 」(同上)[28]と言いつつ、以前出会った3人の百姓娘(そのうちの一人はサンチョの策略でドゥルシネア姫と思い込まされているもの)[29]が姿を見せて草原を山羊のように跳ねまわったのを見たと、加えて手許不如意のドゥルシネア

に4レアルの金銭を都合してやったとも、語ったのであった。これを聞いたサンチョは、「自分の頭がへんになるか、笑い死に死ぬのではないかと思った pensó perder el juicio, o morirse de risa」(同上)[30]。それは「ドゥルシネアのにせ幻術の真相を知っており、姫を幻術にかけた者も、その証言をした者も、余人ではなかったから」(同上)[31]である。

ドゥルシネア(それは実際は最前地上で出会った百姓娘であるにすぎない)の名前を聞いたサンチョは、たちまちにしてドン・キホーテの夢想に対する現実の側からの反撃の拠点を確保したのである。彼自身が臨席しなかった地底の物語は真とも偽とも判定がつかなかった。いや、真と言われても信じる以外に方法はなかった。しかしすでに地底に滞在していた時間の点での両者の齟齬からその真実性を疑っていたサンチョは、このドゥルシネアに話が及ぶに至って確信をもつことになる、すべては従来同様にドン・キホーテの夢想にすぎないと。ドン・キホーテは、モンテシノスが「ここには、過ぎた世々と今の世の貴婦人が、(百姓娘姿のドゥルシネアの)ほかにもたくさん、幻術にかかって、いろいろふしぎな姿で来ておる」(同上)[32]と言ったと語る。しかしそのドゥルシネアは、サンチョが当世のそこらあたりの百姓娘を詐術でもってドゥルシネアと言いくるめたものにすぎない。サンチョはモンテシノス以下の人物たちに対置すべき「現実」はもち合せていないけれども、地底のドゥルシネアに対置さるべき「現実」はもち合せているのである。ここにドン・キホーテの物語る世界の架空性、いいかげんさが際立って明白となる。ドゥルシネアの件だけではない。一事が万事、地底での物語はすべてドン・キホーテの夢想 fantasía にすぎないと、サンチョは断定するのである。前者にとっての理想 el ideal は後者にとってはでたらめ disparate である。

この地底で展開された物語(ドゥルシネアの件は除くとしても)の真実性を疑う者は、じつはサンチョばかりではない。作者セルバンテスにしてからが、この物語を語りながらそこに一抹の疑念を隠しおおせないでいる。この物語を収める続篇第23章の標題に、それはすでに表明されているではないか、「あっぱれなドン・キホーテがモンテシノスの底なし穴で見たと語った驚くべきこと、そのありえないすばらしさにこの冒険は作りごと apócrifa と信ぜられる章」と。

同じく続篇第24章冒頭には、原作者シデ・ハメテ・ベネンヘリ自ら、この件は実際に起きたと思えない、「理由はといえば、今までに起きた冒険がすべてありうることであり、信じうることであったのに、この洞穴の冒険だけは、理性が承認してよい限度をあまりにも越えているので、これを真実と思わせる根拠がどこにもないからだ」(同上)[33]と余白に書き込まれていたとされている。そして続けて、「読者よ、諸君はかしこいのだから、どうともすきなように判断せられたい。わしはこれ以上言うべきことがないし、言えもしないのだ。もっとも、ドン・キホーテは、最後のいまわの床において、この冒険を否認して、あれはかつて物語で読んだ冒険にそっくりであり、ところをえていると見たので、創作してしまった había inventado 旨

を、語ったとやら、噂ではあるが、確かなことに思われてもいるのだ」(同上)[34]とも言ったとされている。

好きなように判断してよろしいと言われたからというわけではないが、わたしたちにはやはりサンチョの側に一票を投じるのが妥当ではあるまいかと思われる。理由はサンチョと同じ、百姓娘ドゥルシネアの登場である。そしてここでわたしたちは一つの重要な指摘をしておきたい。このドゥルシネアの登場はドン・キホーテが意識して登場させたのであると。それは騎士道物語に触発された彼の長い架空の旅、夢想からの覚醒を自ら告げるものであると。ドン・キホーテは夢から覚めたのである。ドゥルシネアを緒にサンチョという「現実」を地底の夢物語の世界と関わらせることによって、自らの語るその物語が虚構であることを明らかにせしめ、自らもまたそれが虚構であることを認識していることを告白したのである。夢に現実をぶつけるのは、これまではサンチョの役目であった。いまその役をドン・キホーテ自身が演じるのである。「(サンチョは) 主人が正気を失い、まったくの狂人となったことを知った」と記されているが、このサンチョの認識は間違っている。逆にドン・キホーテはいまこそ正気に戻ったのである。

これまでの冒険は決して偽りのものではなかった。というか、ドン・キホーテ自身偽りと認識していなかった。幸せにも彼はすべて真実と信じ込んでいたし、信じ込んでいられたのである。過去の騎士道物語へ遡る“時間の旅”は悲い旅であった。サンチョによって現実に引き戻されても、その都度メルリンの幻術を適用することで夢の世界の虚偽性が暴露されることはなかった。しかし今回はその夢がまさに夢であったことに、ドン・キホーテ自ら気づいたのである。ドゥルシネアの登場はそのことを告げるべく発せられたドン・キホーテからの密かな信号にほかならない。

おわりに

ドン・キホーテは二つの旅をする。空間の旅と時間の旅である。愛馬ロシナンテにうち跨がり、従者サンチョ・パンサを引き具して故郷ラ・マンチャからはるばるバルセロナまで往還したのが前者、空間の旅である。一方で彼は過去の騎士道物語が提供する夢の世界、架空の世界に、つねにその身を置いている。それは過去へ向けて時間を遡る、いわば時間の旅となる。その時間の旅がいま終末を迎えようとしている。それはモンテシノスの洞穴へ降りることによって初めて可能となったのである。

オデュッセウスにとっては、冥界へ降りることが帰国の旅の新しい出発点となった。もちろんそのあと直ちにイタケへ帰着したわけではない。パイエケス人の島に至るまで、いま少し架空の地を遍歴する。それと同様に、ドン・キホーテもこのあとすぐに騎士道的冒険から足を洗

うわけではない。このあとも幻術の小舟に乗ってエブロ河を下り、粉ひき所で大立ち廻りを演じることになる（続篇第29章）。ドン・キホーテは夢からすっかり覚めているわけではないのである。しかしながらモンテシノスの洞穴で覚醒への凡その途はついた。そう見てよいのではないか。

空間の旅のほうも、まだバルセロナ訪問が残っている。さらには地中海の船上に、往古オデュッセウス一行が迷走したかもしれない海域に身を置くまでに至る。実際に帰途につくのは、そのバルセロナの浜辺で銀月の騎士との一騎討ちに破れてからのことである。それまではまだ少し時間がある。それに先立ってドン・キホーテは帰り仕度を始めたのである。

オデュッセウスの冥府行は、その帰国を確実なものとするための「いま一つの旅 ἄλλην ὁδόν」であるとされた。同様にドン・キホーテのモンテシノスの洞穴へのカタバシスも、彼をその帰郷へと誘う「いま一つの旅」であったと解される。時間の旅の終末は見えてきたのである。時間の旅が終ることは、空間の旅も終ることである。両者は表裏一体なのであるから。ドン・キホーテは自らの夢に誘われて旅に出たのであるから。夢が覚めれば旅は終るのである。

オデュッセウスは、そこが冥界（この世とは違う世界）であることを最初から意識した上で下降カタバシスした。ドン・キホーテは異界と明瞭に意識した上で下降したのでは、おそらくない（そこが異界・あの世 el otro mundo であるというのはサンチョの認識である）。下降し上界へ戻ってきたあと、そこを過去の人間＝霊が巣喰う異界としたのである。その上で彼は、自らの語る地底の世界が架空の世界であることを、ドゥルシネアという「現実」を混入させることで示唆した。

ただ言えば、ドン・キホーテの語る地底冒険譚が真実であるか否かは、じつは問題ではない。問題は、それが従来と同じ架空の夢物語であることをドン・キホーテ自身が気づいていることである。この認識を獲得したことがこの冒険行のもつ最大の意味である。

オデュッセウスは冥界でテイレシアスと母親の霊魂とに出会い、その予言と情報を受けることによって、帰国へ向けての新たな旅への足掛りを得た。ドン・キホーテはモンテシノスの洞穴へ下降し、また戻ってくることによって、それまでの夢想世界、いわば架空の旅から脱出する手掛りを得たのである。いずれにせよカタバシスと呼称される「いま一つの旅」は、それぞれの作品の中で特異な１章を形成していることが見てとれるであろう。

セルバンテスがいわゆる古典（古代ギリシア・ローマ文学）の影響を直接間接に受けていたことは、まず疑いえない。上はホメロスを始めとして下は紀元後のギリシア小説に至るまで、その作品には夥しい量の古典作品への言及がなされている[35]。しかし単に言及するに止めるのみならず古典作品を受容し消化吸収して、その全体なり一部なりを己が作中に巧妙に取り込んだ（とみられる）例もある。本篇の正篇第18章の例の羊群を軍勢と見誤る場面はそのわかり易い一例であろう。Krappe はこの場面の“源泉 la fuente”にソポクレス『アイアス』におけ

るアイアス狂乱の場を想定するが、これはほぼ首肯できる[36]。女神アテナに心を狂わされ、家畜の群をギリシアの将兵と見誤って切りかかるアイアスは、騎士道物語を読みすぎて心狂い、同じく羊群を軍勢と見誤って切りかかるドン・キホーテと同じ位相にある。ここにはセルバンテスの意図的な作意が窺われるといってもよい。

それでは上にわたしたちが見てきた“モンテシノス洞穴探検の場”はいかがであろうか。そこには“オデュッセウスの冥府行”がカタバシスの先蹤として見え隠れしていないであろうか。冥界と冥界に似た地底の世界。下降カタバシスを通じてなされるいま一つの旅。その旅によって確実となる新しい門出、新しい旅。架空の旅からの脱皮。これが『オデュッセイア』第11歌と『ドン・キホーテ』続篇第23章両者に通底する項目である。となるとここに両者の近似性が明白となるのではないか。セルバンテスの脳中には『オデュッセイア』第11歌が鳴っていたと、わたしたちは主張する。独断あるいは偏見と断ずるもよし、セルバンテスの了解はすでに取りつけてある（「はじめに」を見よ）。ただ遥かな別のところからサンチョの声が聞こえてくるような気がしないでもない。「しなさることをようく見なせえよ mirase bien lo que hacía」というあの声が。

註

1）「ネキュイア νέκυια」（招魂あるいは魂迎え）とも称される。

2）Miguel de Cervantes, *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*, I., edición, prólogo y notas de Francisco Rodríguez Marín, Clásicos Castellanos, Espasa-Calpe, S.A., Madrid, 1964, p.9. 訳文は永田寛定訳（岩波文庫）を借用させていただく。但し音引きは省かせていただいた。

3）訳文は松平千秋訳（岩波文庫）を借用させていただく。

4）Cf. W. W. Merry & J. Riddell (ed.), *Homer's Odyssey*, Vol. I., Oxford, 1886, ad 10. 508.

5）第11歌で母アンティクレイアの霊と対面したオデュッセウスは、「どのようにして、この陰鬱な闇の世界に降りてきた ἦλθες のか」（155）と訊かれて「テイレシアスの予言を訊くために、どうしても冥王の館へ降りてこなければならなかった χρειώ με κατήγαγεν」（164）と答えている。オデュッセウスの使用した動詞 κατήγαγεν（κατάγειν）は具体的な下降を示すから、海原を航海しても彼には下降カタバシスの意識があったのである。

『オデュッセイア』を踏襲したウェルギリウス『アエネイス』では、アエネアスはクマエ近郊で巫女シビュラの案内でじっさいに洞穴に潜入カタバシス、すなわち物理的に下降し、冥界に至ることになっている。Cf.Vergilius, *Aeneis*, VI. 262～267.

6）この帰国への途は「神々の会議」（第5巻）におけるゼウスの裁定でもって最終的に決定される。

7）冥府から戻ってきたオデュッセウスにキルケは言う、「そして曙の女神が現われたら、直ぐに船を出すのです。道筋も示そうし、その他必要なことも一切わたしが教えてあげよう αὐτὰρ ἐγὼ δείξω

ὁδὸν ἡδὲ ἕκαστα / σημανέω,」(*Od.* 12. 25～26)。

8) *Op. cit.* Ⅵ., p.83.

9) *Op. cit.* Ⅵ., p.84.

10) *Op. cit.* Ⅵ., p.107.

11) *Op. cit.* Ⅵ., p.103.

12) *Op. cit.* Ⅵ., p.86.

13) シャルルマーニュ帝のスペイン遠征は778年。この歴史事件がのちに中世フランス最古の武勲詩『ロランの歌』となって結実した（成立年代は12世紀後半とされる）。ただし『ロランの歌』にはモンテシノスは（またその従兄で親友のドゥランダルテも）登場しない。スペインのロマンセにのみ登場する騎士である。またドゥランダルテ Durandarte は元来ロラン所有の名剣の名（デュランダル Durendal）にすぎなかったものを新たに設定した騎士の名に転用したものである。以下を参照。「わしろわれ、デュランダルもて大いに打ちまくらん。／そはわれ脇に佩きたる名剣なり。Einz i ferrai de Durendal asez,/ Ma bone espee què ai ceint al costét. 1065～66」(『ロランの歌』有永弘人訳、岩波文庫、70ページ。Cf. Cesare Segre (ed.), *La Chanson de Roland*, Tome Ⅰ., Genève, 1989, p.146)。

14) *Op. cit.* Ⅵ., p.91～92.

15) *Op. cit.* Ⅱ., p.81.

16) *Op. cit.* Ⅱ., p.77.

17) ここでは『アマディス・デ・ガウラ』などのいわばブルターニュ系の騎士道物語にシャルルマーニュ系のロマンセが取って代わる。しかしそれもすでにドン・キホーテにはお馴染みのものであった。ロンセスバリェスでロルダン（ロラン）を屠った当の騎士ベルナルド・デル・カルピオ、シャルルマーニュ帝十二卿将の一人レイナルドス・デ・モンタルバン（レイノー・ド・モントバン）、ロルダンの義父で裏切者のガラロン（ガヌロン）らがそれである。この大河物語の冒頭（正篇第1章）を参照。また和尚と床屋がドン・キホーテの蔵書を焚書する同第6章には、アグスティン・アロンソ作『無敵の騎士ベルナルド・デル・カルピオの功名譚』(1585年) 及びフランシスコ・ガリド・デ・ビリェナ作『真書ロンセスバリェスの戦。付けたりフランス十二卿将の死』(1583年) も蔵書の一部として言及されている。Cf. *op. cit.* Ⅰ., p.157n.

18) この箇所に付けられた Rodríguez Marín の校注は、ここでセルバンテスはドゥランダルテの死を扱った古い二篇のロマンセの章句を混合して提示している、そしてさらに自ら創作せる詩行（テクストの最後の2行）を付加しているという Clemencín の主張を紹介している。Cf. *op. cit.* Ⅵ., p.95～96.

19) このときモンテシノスは、「賢人メルリンにいろいろとあのような予言をさせた、あっぱれな騎士 aquel gran caballero de quien tantas cosas tiene profetizadas el sabio Merlín」(Ⅵ., p.99) と言い、ドン・キホーテの登場が予定され期待されていたことを明らかにしている。引用句中のメルリンの予言 tantas cosas profetizadas の内容はいま一つ曖昧であるが、そこでドン・キホーテは500年の呪縛からの解放者に擬せられていたのでもあろうか。

20) *Op. cit.* Ⅵ., p.107.

21) *Op. cit.* Ⅰ., p.193.

22) *Op. cit.* Ⅰ., p.200.

23) Cf. Ramón Menéndez Pidal, *De Cervantes y Lope de Vega*, Colección Austral, No.120, Espasa Calpe, S. A., Madrid, 1964, p.49.

24) *Op. cit.* Ⅵ., p.87.

25) *Op. cit.* Ⅵ., p.86.

26) *Op. cit.* Ⅵ., p.107.

27) *Op. cit.* Ⅵ., p.113.

28) *Op. cit.* Ⅵ., p.106.

29) 同続篇第10章。Cf. *op. cit.* Ⅴ., p.188, 192.

30) *Op. cit.* Ⅵ., p.107.

31) *Op. cit.* Ⅵ., p.107.

32) *Op. cit.* Ⅵ., p.107. 地底の、過去の世界にいてしかるべき人間たちと現世の地上の人間とを混在させて語ることで、モンテシノス自身も自らの創り出した世界の虚偽性を認めていること、結果としてそうなっていること、あるいはそこに作者の意図が見て取れるということにわたしたちは留意すべきである。あるいはまたこうも考えられようか。サンチョにとって、もしドン・キホーテの語る話を信じるとすれば、それは冥界 el otro mundo（サンチョは洞穴の中の世界を“あの世 el otro mundo”と呼んだ）へ降ったドン・キホーテが霊魂と出会った話としてである。それならば信じられる話である。しかしそこにドゥルシネアが混入される。彼女は現世に生きる人間であって、冥界の住人ではない。その彼女を冥界の霊魂に算入することでドン・キホーテの語る物語は破綻したと、サンチョはみなすのであると。

33) *Op. cit.* Ⅵ., p.115～16.

34) *Op. cit.* Ⅵ., p.116～17.

35) その一例として『ドン・キホーテ』中のドン・ディエゴが息子自慢をする条りをあげておく。そこにはホメロス『イリアス』、マルティアリス、ウェルギリウス、ホラティウス、ペルシウス、ユウェナリス、ティブルスなどの名が見えている（続篇第16章）。ギリシア小説とはヘリオドロス『エチオピア物語』（3世紀後半）である。セルバンテスは『模範小説集』の序文でこれに言及し、次に執筆を計画している『ペルシレスの苦難』は、この古典に匹敵するものとなろうと自信たっぷりに予告している。またその『模範小説集』に所収の『犬の対話』の中には、オデュッセウスについて、いろいろな地を旅行し、いろいろな民族や人間たちと交ったという理由だけで世間から賢人と呼ばれているという甚だ皮肉っぽい言及がなされていることも付け加えておこう。

36) Cf. A. H. Krappe, La fuente clásica de Miguel de Cervantes, *Don Quijote*, Primera Parte, capítulo ⅩⅧ, *The Romanic Review*, ⅩⅩ (1929), Columbia U. P., p.42～43.

（たんげ・かずひこ　外国語学部教授）